

割礼

知っておきたいキリスト教のことば (38)

聖書には「割礼」という言葉が 120 回以上出てきますが、日本にはそのような慣習がないためなかなか理解しにくいものです。割礼という行為自体は、ユダヤ人だけではなくエジプト人やアラブ人などもおこなっていました。幼少時に男性生殖器の包皮を切り取る儀式で、宗教的な意味合いだけではなく、衛生的な側面も持っていたようです。ユダヤ教では男子は生後八日目に割礼を受けて聖別するようにと、律法で定められていました。

旧約聖書で割礼は、神さまとイスラエルの民の契約のしるしとして出てきます。創世記 17 章 9～14 節で神さまはアブラハムに対し、イスラエルとの契約のしるしとして、あなたもその子孫も割礼を受けるようにと命じます。

このことから、イスラエルの民にとって「割礼」とは選ばれた民であることの象徴となっていきます。特にバビロン捕囚の際には、ユダヤ人以外の異邦人と自分たちを区別する共同体のアイデンティティとして、割礼は重要視されました。今でもユダヤ教において、割礼と安息日は律法の中でとても大切にされています。

初期キリスト教においても、割礼の習慣は受け継がれます。そして異邦人に宣教する中で、割礼を受けているか否かが問題になっていきます。

その中でパウロは、割礼に固執することはキリストから離れることであり、割礼を誇ることはキリストの十字架を無視することだと言います。そして人が義とされるのは割礼によるのではなく信仰によるのだと言い切ります。大切なのは割礼という律法的な慣習ではなく、イエス様を信じること、つまり心に割礼を受けることだということなのです。



次回は「カテキズム」です。お楽しみに。